

〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉諸仏名対照一覧

柴 田 泰

はじめに

〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉の諸仏名に関する一連の論考は、すでに二、三の機会に考察し発表した⁽¹⁾。そこでの要旨の第一は、〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉に限らず、大乘經典の諸仏は、いずれも〈仏名経類（とりわけ、菩提流支訳『仏名経』十二巻）〉に訳語を変えて登場する点である。このことは、大乘經典相互の関係を明らかにしてくれるだけでなく、ひいては、大乘仏教の大きな特徴の一つである多仏思想の成立・展開に資料的に確かな手がかりを与えてくれるものと思われる。多仏思想については、原始仏教から考えられていた過去の諸仏が、やがて大乘仏教に至って、未来・現在の諸仏となって、新たに無数の諸仏が登場し活躍する。その最たるものが仏名を列挙する〈仏名経類〉である。中国においては、それのみにとどまらず、疑經の中に膨大な数となって再構成される。すでに、こうした諸仏名の問題については、その意図を異にしながらも、幾多の論考が認められるが⁽²⁾、しかしながら、とくに大乘經典における諸仏名を資料的に整理分析し、明確に辿った研究となると極めて少ない。

第二は、或る經典の諸異本以外に現われる諸仏名の比較検討は、当該經典諸異本の成立過程・構成上の問題を明らかにする点である。全く異なった資料に現われる関係諸仏は、当該經典の貴重な異本の役割を有するからである。〈無量寿経〉について言えば、梵藏漢七本の成立過程について、とくに本願文を中心として多くの研究がなされているが、なお『無量寿莊嚴経』三十六願の位置づけには、〈四十八願系經典〉の先後関係で、二つの見解に別かれている⁽³⁾。〈阿弥陀経〉では、六方諸仏転用説は〈仏名経〉に相応仏名が認められて、初めて主張されたのである⁽⁴⁾。これらの点は、その他の大乘經典においても、同様の可能性を含んでいる。

以上の二点は、すでに発表した諸論考の大きな要旨であるが、更に細かな点としては、新たな訳例が著名な諸仏の解明に寄与する点、全く関係がないとされていた經典が同一の諸仏を対応して登場させる例を知ることによって、相互に関連していることに気づく点なども知られるであろう。

本稿は、すでに発表した二、三の論考において、紙数の制限などにより、割愛した諸資料に認められる諸仏名の比較対照を表示し、その要点を再説し、併せて残された課題などに論及することにした。

- (1) 「『阿弥陀経』六方諸仏の異名」（『印仏研』第23巻第2号）
 「菩提流支訳『仏名経』の構成について」（『印仏研』第24巻第1号）
 「〈無量寿経〉の諸仏名」（『印仏研』第25巻第1号）

なお、筆者には、ほぼ10年程前に「無量寿経過去仏名について」（『札幌大谷短期大学紀要』第2号）、「無量寿経十二光仏について」（『印仏研』第15巻第2号）、「無量寿経説法会の比丘衆」（『札幌大谷短期大学紀要』第4号）と一連の論考を発表したが、そこでは、未だ〈仏名経類〉、疑經典などの資料は見出しえず、無量寿経諸異本に限った比較検討から、それらの成立過程を考察したものである。

- (2) たとえば、月輪賢隆『仏典の批判的研究』pp. 86-89,

- 井ノ口泰淳「敦煌本「仏名経の諸系統」(『東方学報』京都 第35冊),
 塩入良道「中国仏教に於ける礼懺と仏名経典」(『結城教授頌寿記念仏教思想史論集』),
 同 「中国仏教における仏名経の性格とその源流」(『東洋文化研究所紀要』第42冊),
 宮坂宥勝『仏教の起源』pp. 291-332,
 田賀竜彦『授記思想の源流と展開』pp. 68-89,
 Weller, F. : Tausend Buddhanamen des Bhadrakalpa, Leipzig 1928, など。
- (3) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp. 379-391. 宮地廓慧「大無量寿異本対照私考(二)」(『印仏研』第20巻 第2号) 参照
- (4) 藤田博士、前掲書、pp. 213-221。

〈無量寿経〉諸仏名

1. 過去仏名

〈無量寿経〉において、諸仏の登場する記述は、まず第一に、正宗分の冒頭に認められる。本経正宗分の書き出しは、

仏、阿難に告げたまわく。「乃往過去久遠無量不可思議無央数劫に、錠光如来が世に興出して、無量の衆生を強化し度脱し、皆得道せしめて、乃ち滅度を取りたもうた。

次に、如来がおられた。名づけて光遠という。その次を月光と名づく、次を栴檀香と名づく、次を善山王と名づく、……、次を竜音と名づく、次を処世と名づく、此のように、諸仏は皆悉く已に過ぎたまいき。

その時、次に仏がおられた。世自在王如来・応供・等正覚・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊と名づく⁽¹⁾

で始まっている。すなわち、法蔵菩薩の師である世自在王仏までに、錠光如来から多くの過去仏が出現されたことを説いており、古来〔過去五十三仏〕と称している。ところで、この過去の諸仏は諸異本、並びに他の資料では、その数が一致していない。諸資料と世自在王仏を含めた数を挙げると以下の通りである。⁽²⁾

『大阿弥陀経』 支謙訳	34仏
『無量清浄平等覚経』 支婁迦讖訳	37仏
『無量寿経』 康僧鎧訳	54仏
『無量寿如来会』 菩提流支訳	42仏
『無量寿莊嚴経』 法賢訳	38仏
梵本 Sukhāvāṭīvyūha	81仏 ⁽³⁾
チベット訳 Hphags ḥod dpag med kyibkod pa shes bya ba theg pa chen poḥi mdo	82仏
『仏名経』 卷四 菩提流支訳	30仏 (後半欠く)
〃 卷十一	45仏
〃 卷十二	26仏 (途中欠く)
〃 卷十二	41仏 (前欠く)
『十住毘婆沙論』 「易行品」 羅什訳	91仏
敦煌スライン本 No. 6761	48仏

以上が、過去仏名の認められる諸資料とその数であり、これらを比較検討することによって、すでに発表した論考の諸点がより明らかに納得されるであろう。

ここで、その要点を再説すると、

1. 数が諸本によって著しく差のあることは、伝承の過程で大きな異動のあったことが予想できる。
2. 梵本とは最もよく対応する漢訳資料は諸異本ではなく、「易行品」である。
3. 漢訳資料からみて、最初は40仏前後の形態であった。従って、梵本・「易行品」の後半部の諸仏は、後に増広された。
4. 『無量寿莊嚴経』には、梵本・「易行品」にのみ相応する仏名がある。
5. 『無量清浄平等覚経』『無量寿経』には査定できない仏名が多い。

などである。

2. 十三仏名

諸仏が説かれる第二の記述は、第一の過去仏が正宗分の冒頭であるのとは構成上対蹠的に、正宗分の最後に現われる。阿弥陀仏の本願、浄土の莊嚴、往生人の因果が説かれ終った後に、他方仏土の諸菩薩の浄土往生が説かれるが、かれら数十億、数百億の菩薩の住する仏名土に認められる。

仏、弥勒に告げたまわく。「但、我が刹の諸菩薩等のみ彼の国に往生するにあらず。他方の仏土も、亦復かくの如し、その第一の仏を名づけて遠照という。彼しこに百八十億の菩薩あり。皆まさに往生すべし。その第二の仏を名づけて宝蔵という。……その第十三の仏を名づけて無畏という。彼しこに七百九十億の大菩薩衆あり、諸の小菩薩及び比丘等の称計すべからず。皆まさに往生すべし」⁽⁴⁾

ここでの諸仏数は、〈無量寿経〉諸異本、並びに『仏名経』4箇所、「易行品」、⁽⁵⁾いずれも十二仏から十四・五仏であって、大きな差異はない。従って、伝承の過程での増減は無かったことになるが、ここで問題にされる点をすでに発表した論考から挙げると、

1. この章は、〈無量寿経〉全体の構成の上で異質である。⁽⁶⁾
2. 〈仏名経類〉では、〔過去仏〕と〔十三仏〕とが一類の諸仏とされた。

という点である。

以上が、〈無量寿経〉諸仏名について、最近発表した論考の要旨であったが、これらの諸点は後の図表を見ることによって、より具体的に知られるであろう。

〈無量寿経〉には、以上の〔過去仏〕、〔十三仏名〕のほかにも、序文において、釈尊の説法を聴聞する〔声聞菩薩〕、或いは、阿弥陀仏の光明の威力を強調する異称〔十二光仏〕が認められる。しかしながら、前者の〔声聞菩薩〕の比較検討については、かつて対照表を掲示して考察し、漢訳諸本の次第が梵本よりも『Lalitavistara』の順序に対応する特徴、諸異本の対応関係などを指摘した。⁽⁷⁾ 後者の〔十二光仏〕についても、〈無量寿経〉諸異本の比較、中国以降に別仏として『大通方広経』、『仏名経』三十卷、『九品往生陀羅尼経』などの疑經典に転用されることを発表した。⁽⁸⁾ すでに、両者の比較対照は関係論稿に表示したし、新たに附加すべき資料は見出しえないので、ここでは取り上げない。

(1) 『無量寿経』康僧鎧訳（大正12・266下-267上）。以降の引用においても、今日〈浄土三部経〉の一つとして、最も依用されている本経を用いる。但し、訳者は仏駄跋陀羅である（藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp. 35-96）。

また、引用文の中で、次に、と諸仏が古い年時から新しい年時へと次第する本経（その他『大阿弥陀経』、『無量清浄平等覚経』）に対して、その前に、と新しい方から古い方へと次第する異本（『無量寿如来会』、『無量寿莊嚴経』、梵本、チベット訳）と訳文の対立する二説があり、かつて種々論議された。今日では、梵文 *pareṇa parataram*（前のさらに前）から問題はないとされている。坪井俊映『浄土三部経概説』 pp. 68-72、藤田博士、前掲書、pp. 177-181、参照。

- (2) 〈無量寿経〉諸異本については、経名・訳者・成立過程など論及すべき問題は多いが、ここでは、一般に用いられる経名・現行本の訳者などに従い、出典箇所も省略する。その他の資料の出典は、
『仏名経』巻四、十一、十二（大正14・134中、178上、下、180上）
『十住毘婆沙論』「易行品」（大正26・42下-43上）、なお当該仏名は疑経『十方千五百仏名経』（大正14・313下）にそのまま転用されている。
敦煌スタイン本No.6761については、拙稿「浄土教関係疑経典の研究一」（『札幌大谷短期大学紀要』第9号、pp. 127-128）、同「『阿弥陀経』六方諸仏の異名」（『印仏研』第23巻第2号）参照、
である。
- (3) *Sukhāvativyūha*, édité par A. Ashikaga, p. 5, l. 7-p. 6, l. 23. 但し、当足利本では、第54仏に当る Candana gandha を欠いているが、荻原本・チベット訳（『梵蔵和英合璧浄土三部経』p. 14, l. 9, p. 288, l. 18）により補正した（藤田宏達『梵文和訳無量寿経・阿弥陀経』 pp. 48-49、186参照）。
- (4) 『無量寿経』（大正12・278下）。
- (5) 『仏名経』巻三、巻七、巻十一、巻十二（大正14・129中、151下、178上、180上中）、『十住毘婆沙論』「易行品」（大正26・43上）。
- (6) この説は、はじめに藤田宏達博士によって指摘された（『原始浄土思想の研究』 pp. 174-175）。
- (7) 拙稿「無量寿経説法会の比丘衆」（『札幌大谷短期大学紀要』第4号）。
- (8) 拙稿「無量寿光十二光仏について」（『印仏研』第15巻第2号）、同「浄土教関係疑経典の研究一」（『札幌大谷短期大学紀要』第8号、pp. 124、128-129、141-142）、同「浄土教関係疑経典の研究二」（『札幌大谷短期大学紀要』第9号、p. 121）。

〈阿弥陀経〉六方諸仏名

〈阿弥陀経〉において、諸仏名が登場する記述は、この比較的短かい経典の中で、その後半部の殆んどを占める所謂〔六方段〕である。

舍利弗よ。我れ今、阿弥陀仏の不可思議功德を讚歎するが如く、東方に、亦阿閼鞞仏、須弥相仏、大須弥仏、須弥光仏、妙音仏がおられる。……。

舍利弗よ。南方世界に、日月燈仏、名聞光仏、大焰肩仏、須弥燈仏、無量精進仏がおられる。……。

舍利弗よ。西方世界に、無量寿仏、無量相仏、……。……。

舍利弗よ。北方世界に、……。……。

舍利弗よ。下方世界に、……。……。

舍利弗よ。上方世界に、……。……⁽¹⁾。

と、六方の恒河沙数の諸仏が、是の称讚不可思議功德一切諸仏所護念経、の信すべきことを證誠する。

ここで、六方諸仏を記述する諸資料を挙げれば、〈阿弥陀経〉梵本・チベット訳・漢訳二本（羅什訳・玄奘訳）の外に、『仏名経』巻六、巻十一、「阿弥陀讚一切諸仏所持之法経」（『現在十方千五百仏名並雜仏同号』所出）、並びに此等の経典から転用した仏名疑経である⁽²⁾。

次に、この六方諸仏に関する従来諸説であるが、就中、最も大きな見解は、藤田宏達博士によ

って主張された仏名経類からの転用説であろう。⁽³⁾博士は、この章の〈阿弥陀経〉全体の構成上の矛盾、とりわけ古来から様々に会通された西方世界の無量寿仏、が更に阿弥陀仏を讃歎するという矛盾と、羅什訳と『仏名経』巻六との密接な対応関係より、これは本来この部分が仏名経類から転用したものである、と主張された。また、矢吹慶輝博士の指摘された「阿弥陀讃一切諸仏所持之法経」についても検討すべきであろう。⁽⁴⁾

この二つの見解を参考として、筆者がすでに論考した要点を諸資料の検討に限って述べると、

1. 「阿弥陀讃一切諸仏所持之法経」の諸仏名は、何らかの漢訳からの転用である。
2. この諸仏名は、敦煌スタイン本No.6761、『十方千五百仏名経』、『現在十方千五百仏名並雜仏同号』所出の「称揚諸仏功德経」(現行本にはない)にも見出せる。
3. 『仏名経』巻十一にも、訳語を異にして現われる。

という点であり、更に、何らかの漢訳経典・その原本の推定、〈阿弥陀経〉と〈仏名経類〉の関連性、中国での訳経状況などを考察した。

ここでは、その際に割愛した対照表を挙げておこう。

- (1) 『阿弥陀経』羅什訳(大正12・347中-348上)。
- (2) 『仏名経』巻六、十一(大正14・143中、174中)。
「阿弥陀讃一切諸仏所持之法経」(大正85・1447中下)。
諸仏名を転用する経典としては、『不思議功德諸仏所護念経』(大正14・360下、363中、364上)、『十方千五百仏名経』(大正14・312中-318上)、敦煌スタイン本No.6761、「称揚諸仏功德経」(大正85・1448上中)など。
- (3) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp. 213-221。
- (4) 矢吹慶輝『鳴沙余韻解説』I、pp. 198-201。

以上が、〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉諸仏名について、すでに発表した論考の諸資料とその要点であったが、本稿では、その都度他日発表予定、と註記し、記載できなかった対照表を挙げる次第である。

そこで、最後にこの対照表から知られる以上の要点の外に、すでに少しく関説し、かつ具体例を記せなかった、その他の問題、以上の要点から派生する今後の課題などに附言しておきたい。

その第一には、はじめに述べたように、こうした問題は〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉だけではなく、その他の大乘経典の諸仏にも必要な点である。たとえば『仏名経』には『法華経』『華嚴経』『悲華経』など、大乘仏教を代表する重要な経典の諸仏が訳語を異にして現われている。しかも、それらは現行本とすべて対応しているわけではない。各品によって対応するものと全く認められないもの、或いは経典に散出するものなどがある。このことは、当該経典の構成上の素材・各品の先後関係、更には成立過程に関与するだけでなく、同一の仏名を見出すことによって、大乘経典相互の関係をも教えてくれるであろう。

第二は、〈仏名経類〉そのものの整理と、そこに認められる新たな大乘経典の諸仏の検索がある。〈仏名経類〉の成立とその展開は、常識的には、小部のグループがあって、それらが徐々に関連し集合して、膨大な諸仏を列挙する仏名経に構成されたと予想されるが、こうした〈仏名経類〉の相互関係を解明しなければならない。すでに筆者は、『仏名経』十二巻に認められた約3,500余仏について、その該当する大乘経典とともに指摘しておいたが、まだ、それよりもはるかに多い残された諸仏からの新たな対応例は検索中である。また、〈仏名経類〉相互の関係についても、殆んど不明の部分が多い。

以上の二点は、未だ資料的にも明確でない多仏思想の成立・発展等に明確な手がかりを与えてくる重要な課題であろう。個々の判明した大乘經典については、追って考察する予定でいる。^{*}

第三には、こうして知られた当該經典以外の、諸資料に認められた相応仏名の訳語によって、著名な仏の資料に関与する点である。たとえば、阿弥陀仏の訳語として、われわれは阿弥陀・無量寿・無量光であることを知っているが、かつて論議された甘露光、無量光明の訳例があることを『仏名經』によって知ることができる。このことは、他の諸仏についても同様であろう。

第四には、疑經に認められる大乘經典諸仏の転用の問題がある。〈無量寿經〉〈阿弥陀經〉諸仏の転用例はすでに述べたが、中国仏教における諸經典の受容などから推測すると、予想通り、『法華經』『般若經』などの仏・菩薩・声聞がそっくり転用されている。逆に、これらの諸例は、中国社会における諸經典の影響、流布を知る上での例證になるであろう。

第五には、敦煌仏名經の問題がある。すでに、『仏名經』十六卷、十八卷、二十卷の復元は井ノ口泰淳教授によってなされているが、敦煌仏名疑經に認められた〈無量寿經〉〈阿弥陀經〉になく、『仏名經』十二巻にもない過去仏、六方諸仏の異名の出現は、今一度敦煌仏名經の再検討を意味している。この例は、他の大乘經典の諸仏の場合にも同様であると仮定してもよいであろう。この場合、〈無量寿經〉〈阿弥陀經〉と同じく、隠された漢訳經典の存在、中国における訳經状況についても、新たな示唆をもたらすであろう。

以上のような諸点が知られるとき、本稿はまだこれらの端緒にすぎない。各分野における諸問題について、一つ一つを明らかにし、多仏思想の総合的成果を探求していく予定である。

※ 〈無量寿經〉〈阿弥陀經〉以外の、現在までに認めえた大乘經典の諸仏と『仏名經』十二巻の対応箇所は以下の通りである。

經 典	『仏名經』十二巻 (大正藏經、第十四巻所収)
『決定毘尼經』 竺法護訳	巻六 (146中)
『大哀經』 〃	巻六 (142下-143上)
『賢劫經』 〃	巻三、四 (129下-134上)
『宝網經』 〃	巻五 (141下)、巻十一 (177下)、巻十二 (179下)
『滅十方冥經』 〃	巻三 (129下)、巻十二 (180中)
『普曜經』 〃	巻十二 (180上)
『法華經』 鳩摩羅什訳	巻五 (140中下)、巻十二 (179下)
『華手經』 〃	巻二、三 (122中-129上)、巻十一 (174下-177下)
『称揚諸仏功德經』 曇摩跋檀訳	巻五 (141上-下)
『悲華經』 曇無讖訳	巻五 (139中-140中)
『華嚴經』 仏陀跋駄羅訳	巻二 (121中)、巻七 (149上-150下)、巻九 (165上中)
『百仏名經』 那連提耶舎訳	巻四 (134上中)
『十二仏名神呪經』 闍那崛多訳	巻三 (129中)
『大宝積經功德宝花敷菩薩会』 菩提流志訳	巻六 (142下)、巻十二 (180中下)

また、相互に対応仏名を載せる經典、片方に転用の認められる經典としては、
 『華手經』(大正16・142中-166上)と『未来星宿劫千仏名經』(大正14・389上-392中、394中-398上)、
 『決定毘尼經』(大正12・39上)と『八仏名号經』(大正14・76中)、
 『十住毘婆沙論』『易行品』(大正26・41中-42上)、『觀仏三昧海經』(大正15・694上-中)と『菩薩藏經』(大正24・

1087上)、『大乘宝月童子問法経』(大正14・108下-109中)、

『菩薩本業経』(大正10・446下-447上)と『菩薩瓔珞本業経』(大正24・1010下)、

『宝網経』(大正14・80上-84下)と『観虚空蔵菩薩経』(大正13・679上)、

など(但し、仏名疑経に認められる明らかな転用は除く)である。

その他、諸仏名を記載する経典、現存仏名経類、疑経等の主なものを挙げると、

『央掘摩羅経』、『仏本行集経』、『小品般若経』、『兜沙経』、『大宝積経密迹金剛力士会』、『中陰経』、『大集経』、『奮迅王問経』、『僧伽吒経』、『菩薩瓔珞経』、『金光明最勝王経』、『大乘不思議神通境界経』、『菩提心論』、

『千仏因縁経』、『十吉祥経』、『受持七仏名号所生功德経』、『仏冠経』、『諸仏経』、『仏名経』三十卷、『十方千五百仏名経』、『五千五百仏名神呪経』、『百仏経』、『不思議功德諸仏所護念経』、『過去莊嚴劫千仏名経』、『現在賢劫千仏名経』、『大通方広経』、『現在十方千五百仏名並雜仏同号』

などと、その諸異本である(なお、塩入良道「中国仏教における仏名経の性格とその源流」『東洋文化研究所紀要』第42冊、参照)。

過 去 仏 名

Sukhāvativyūha	『大阿弥陀經』	『無量清淨平等覺經』	『無 量 寿 經』	『無量寿如来會』	『無量寿莊嚴經』
1, Dipāmkara	提 想 竭 羅	定 光	錠 光	然 燈	然 燈
2, Pratāpavat	(以 下 略)	曜 光	光	遠 苦 行	鉢 羅 多 波 野 輪
3, Prabhākara			月 光	月 面	發 光
4, Candanagandha		(日 月)香	栴 檀 香	旃 檀 香	贊 那 曩 識 羅 護
5, Sumerukalpa		安 明 山	善 山 王 (須 弥 天 冠) (須 弥 等 曜)	蘇 迷 盧 積 妙 高 劫	須 弥 劫
6, Candrānana		日 月 面	月 色 (正 離 念)	離 垢 面	月 面
7, Vimalānana		無 塵 垢	無 著	不 染 污	無 垢 面
8, Anupalīpta		無 沾 污	無 著	不 染 污	無 著
9, Vimalaprabha					
10, Nāgābhibhū		如 竜 無 所 不 伏	竜 天	竜 天	竜 主
11, Sūryānana		(日 光)	(夜 光)		日 面
12, Girirājaghoṣa		大 音 王		山 声 王	山 響 音 王
13, Sumerukūṭa			安 明 頂 (不 動 地) (琉 璃 妙 華) (琉 璃 金 色)	蘇 迷 盧 積	須 弥 峯
14, Suvarṇaprabhāsa		金 藏	金 藏	金 藏	金 藏
15, Jyotiṣprabha		焰 宝 光	炎 光	照 曜 光	火 光
			炎 根	光 帝	
		有 拳 地	地 種	大 地 種 姓	不 動 地
16, Vaiḍūryanirbhāsa		琉 璃 光		光 明 熾 盛 琉 璃 金 光	瑠 璃 光
17, Brahmaghoṣa					
18, Candrābhibhū		(日 月 光)	月 像	月 像	月 王
19, Sūryaghoṣa		日 音 声	日 音		日 音
20, Muktakusumapratimaṇḍitaprabha		光 明 華	解 脫 莊 嚴 光	開 敷 花 莊 嚴 光	散 華 莊 嚴
21, Śrīkūṭa					吉 祥 峯
22, Sāgaravarabuddhivikrīditābhiñña		神 通 遊 持 意 如 海	海 覺 神 通	妙 海 勝 覺 遊 戲 神 通	持 海 慧 自 在 通 王
23, Varaprabha		(嗟 歎 光) (具 足 宝 潔) (光 開 化)	(水 光)	(金 剛 光)	(施 光)
24, Mahāgandharājanirbhāsa		大 香 聞	大 香	大 阿 伽 陀 香 光	大 香 象 光
25, Vyapagatakhilamalapratigha		降 棄 悲 嫉	離 捨 塵 厭	捨 離 煩 惱 心	離 一 切 苦
26, Śūrakūṭa			(宝 炎)	(宝 增 長)	勇 猛 峯

比較対照表

『仏名経』卷四	『同』卷十一	『同』卷十二	『同』卷十二	『易行品』	Stein, No. 6761	cf. Sukh. Tibet.
然燈	然燈	大威徳	大威徳	然燈		mar-me mdsad
大威徳	大威徳力	大威徳		威勢		(以下略、但し参考仏名 記載)
月面	(日月)	月光			月光	
栴檀香	栴檀香	栴檀香		栴檀香	栴檀香	
弥留山		須弥劫		如須弥	善山劫	
弥留劫	須弥劫	(山積)			(山劫)	
(大面)	月色	月色		月面	月色	
無染	不染	無垢色		(浄面)	無垢色	
無染	不染	無染		無染	無染	
竜天	降伏竜天	竜勝		竜勝	降伏竜天	
	金色鏡像	金色		竜勝	降伏竜天	
山声自在王	山声自在王	山吼自在王		音山	金山音王	
		勝声因陀羅王		王	山音王	
須弥山	山積			山頂	(須弥巖)	ri-rab dbyans アリ
		善須弥山				
金蔵	(須弥蔵)	金蔵		金蔵	(金宝蔵)	gser-ḥod
火光	(供養光)	火光		(光明)	火光	skar-maḥi ḥod
(樹提自在王)		火自在			(火王)	
地寂	(勝覺地)	地迦			地尊	
勝琉璃金光明	(妙琉璃花)	(琉璃華)		(梵声)	(瑠璃花)	vai-ḍūrya snai
	勝琉璃金形象	勝琉璃金光明		(琉璃)	勝瑠璃金宝光明	tshans-paḥi bdyans
月像	降伏月	月勝		月勝	伏月光	
(月声)	日声	(月声)		日音	(音声)	
散華光明莊嚴	散華莊嚴	散華莊嚴光		華莊嚴	嚴花浄光	
				(徳頂華)		dpal-brtsegs
海山智慧奮迅通	海山智奮迅通			海雲慧遊	大海山覺遊行神通	
(金剛光)	(水光)			(水光)	(水光)	
大香光	大香鏡像	大香去照明		(道映)	大光香進	
遠離瞋恨心		離一切染意		大除惡根	離心穢	
	(不動山集)	(聚集宝)		離	(宝瑱)	
		(宝勝)		(勇健)		

27, Ratnajaha		(妙 頂) (勇 立)	(勇 猛 積) (勝 積)	(宝 光)
28, Mahāguṇadhara buddhiprāptābhijñā		功 德 持 慧	持 大 功 德 法 施 神 通	持 多 德 得 通
29, Candrasūryajihmīkaraṇa		蔽 日 月 光	映 蔽 日 月 光	過 日 月 光
		日 月 琉 璃 光		
30, Uttaptavaidūryanirbhāsa	妙 琉 璃 紫 磨 金 焰	無 上 琉 璃 光	照 曜 琉 璃	最 上 琉 璃 光
31, Cittadhārābuddhi-saṅkusumitābhyudgāta	心 持 道 華 無 能 過 者	(最 上 首) (菩 提 華)	心 覺 花	慧 花 開 心 行 出 生
		月 明 月 光		
		日 光 日 光		
32, Puṣpāvātīvanarāja-saṅkusumitābhijñā	(積 衆 華)	華 色 王	花 瓊 瑤 色 王 開 敷 神 通	大 華 林 通 王
33, Puṣpākara				
34, Udakacandropama	水 月 光	水 月 光	水 月 光	(一 月 光)
35, Avidyāndhakāravīdhvaṃsana-kara	除 衆 冥	除 癡 冥	破 無 明 暗	破 無 明 黑 暗
36, Lokendra				
37, Muktaçchatrāpravāḍasadr̥śa			真 珠 珊 瑚 蓋	真 珠 珊 瑚 蓋
	(日 光 蓋) (溫 和)	(度 蓋 行) (淨 信) (善 宿 神) (威 神)		
38, Tiṣya			底 沙	
39, Dharmamativinanditarāja	法 意	法 慧	(勝 法 慧 花 吼)	(三 乘 法 自 在 王)
40, Simhasāgarakūṭāvinanditarāja	師 子 威 象 王 步	(鸞 子 音)	有 師 子 吼 鵝 鴉 聲	師 子 海 峯 自 在 王
41, Sāgaramerucandra	(世 豪)			
42, Brahma svaranādābhinandina	(淨 音)	(竜 音)	梵 音 竜 吼	梵 音 聲 自 在 王
	(不 可 勝)	處 世 世 主		
43, Kusumasāmbhava				
⋮				
81, Lokeśvararāja	34. 樓 夷 亘 羅	37. 樓 夷 亘 羅	54. 世 自 在 王	42. 世 間 自 在 王
				38. 世 自 在 王

Sukh. (続き)	易行品(続き)	Tibet. (続き)	Sukh. (続き)	易行品(続き)	Tibet. (続き)
44, Prāptasena	得 衆			淨 明	
45, Candrabhānu	日 月			梵 音	
46, Merukūṭa	如 須 弥 山			琉 璃 藏	
47, Candraprabha	月 明			蔽 日 月	
48, Vimalanetra	淨 眼			日 音 聲	
	音 聲 自 在			華 光 明	
49, Girirājaghoṣeśvara	山 王		50, Kusumaprabha	散 華	
	須 弥 頂		51, Kusumavṛṣṭyābhīprakīrṇa	雨 華	
	金 藏		52, Ratnacchatra	竜 蓋	
			53, Padmavīthyupaśobhita	莊 嚴 道 路	

〈無量寿經〉 〈阿弥陀經〉 諸仏名対照一覧

(月 光)	(勝 山) (勇 猛 山) 多功德法住持得通	(德 山) (勇 猛 山)	(勝 積) (勝 仙) 住持多功德通法	(得 正 慧) 持 大 功 德 蔽 日 明	(功 德 嚴) (勇 健 嚴) 功德受持法果得 (神 通) 多功蔽日月光 日月瑠璃光
勝琉璃快智慧俱蘇摩	日月琉璃光 勝 琉 璃 光 心間智多拘蘇摩勝		日月琉璃光 心 菩 提 華 勝 (日 月)	真 琉 璃 明 (華 超 出) (菩 提 提) (持 雜 寶) (開 智 慧)	淨 瑠 璃 光 心 出 菩 提 花 (日 月 照)
日 華 髮 色 王 通	月 光 日 光 散華王拘蘇摩通		日 光 華 髮 色 王 鉤 修 弥 多 通	(衆 華)	花 色 王 神 通
水 月 光 30. 破無明闇	(梅 檀 月 光) 破 無 明 闇		水 月 光 明 破 無 明 闇	水 月 破 癡 愛 闇	水 月 光 離 無 明 闇
	(普 蓋 波 婆 羅) (星 宿) 弗 沙 法 慧 增 長 師 子 鵝 王 山 吼		(普 蓋 寶) (增 長 法 樂) 種 種 師 子 声 增 長 吼	珠 宝 蓋 珊 瑚 色 妙 法 意 師 子 吼 師 子 行 (世 主)	真 珠 珊 琉 蓋 (垣 舍) 弗 星 法 意 遊 戲 師 子 山 雷 音 声
	梵 声 竜 奮 迅 世 間 因 陀 羅	梵 声 竜 奮 迅 世 間 勝 上	梵 自 在 竜 吼 世 間 自 在	梵 音 說 華 生 :	梵 音 雷
	45. 世間自在王 ※十三仏名へ続く	26 (師子奮迅吼)	41. 世間自在王 ※十三仏名へ続く	91. 世自在王 ※次第逆 ※十三仏名へ続く	48. 世自在王

me-tog-gi hbyun gnas

h̄jig-rten dban-po

82. h̄jig-rten dban
phyug rgyal-po

Sukh. (続き)	易行品(続き)	Tibet.(続き)	Sukh. (続き)	易行品(続き)	Tibet. (続き)
54, Candanagandha ad.	蓮 華 香 梅 檀 香	tsan-dan-gyi dri	62, Mahāguṇadhara	持 大 功 德	
55, Tagaragandha	多 伽 羅 香 德 頂		63, Tamālapatracan danakardama	多 摩 羅 跋 拏 檀 香	
56, Ratnanirbhāsa	宝 藏		64, Kusumābhijñā	智 華	
57, Nirmita	無 相		65, Ajñānavidhvamsa na	破 無 明	
58, Mahāvvyūha	大 莊 嚴		66, Keśarin	師 子 鬘	
59, Vyapagatakhiladoṣa	離 瞋 恨		67, Muktaçchatra	珠 蓋	
60, Brahmaghoṣa	超 勇		68, Suvarṇagarbha		gser-gyi sn̄in po
61, Saptaratnābhivṛṣṭa	雨 七 宝		69, Vaiḍūryagarbha		vai-ḍūrya-ḥi sn̄in po
			70, Mahāketu	大 相	
			71, Dharmaketu	相 德	

72, Ratnaśrī	宝 德 月 德	世 相 梵 相
73, Narendra	人 王	法 意
74, Lokendra	世 王	79, Simha
75, Kāruṇika	慈 悲	80, Simhamati
76, Lokasundara	世 妙	81, Lokeśvararāja
		師 子 意 世 自 在 王

※1. 『大阿弥陀経』の音訳仏名の多くは査定できない。また、印刷上難かしいので省略。チベット訳は殆んど梵本と一致するので、とくに参考となる仏名のみを記載。

2. () 内の仏名は相応しないもの、また訳語としては適切でなくとも漢訳相互に相応するものは並列した。
3. 本表は、過去仏名が諸資料に如何なる訳語で現われているか、全体的にみてどのような特徴が認められるかという意図で表示したものである。従って、厳正な言語学分野から問題にすれば多くの難点があろう。たとえば、今日知られる梵本の28写本(藤田宏達『梵文和訳無量寿経・阿弥陀経』pp.7-18)の校合が必要であろうし、また、(無量寿経)漢訳諸本の原語にも問題があり(藤田宏達『インドの浄土思想』『講座東洋思想6』p.10参照)、この段階での対照は有効性が少ない。更に、諸資料の中で最も原形を示すとされる『大阿弥陀経』が査定できない。これに加えて、訳者の達意識・誤訳・筆者の査定の誤りなどもある。これらの難点は極めて重要であり、他日別な見地から考究せねばならないであろう。ここでは、その前の段階として、今日見出しえた諸資料を挙げたわけである。

十 三 仏 名 一 覧

Sukh.	『無淨覺 平等經』	『無量壽 經』	『無量壽 如來會』	『無量壽 莊嚴經』	『仏名經』 卷 三	『同』卷七	『同』卷 十 一	『同』卷 十 二	『易行品』
Duṣprasaha	光 遠 焰	遠 照	難 忍	難 忍	難 勝	難 勝	可 得 報	難 勝	難 勝
Ratnākara	宝 積	宝 藏	宝 藏	宝 藏	宝 作	金色波頭摩成王	甘 露 声	宝 作	宝 德
Jyotiṣrabha	儒 無 垢	無 量 音	無 量 声	火 光	無 量 声	宝 作	樹 提 光	甘 露 声	喜 音
Amitaprabha	無 極 光 明	甘 露 味	光 明	無 量 光	樹 提	無 量 声	那 羅 延 首 竜	勝 光	光 明
Lokapradīpa	世 無 上	竜 勝	竜 天	世 燈	竜 天	親 光	力 天	竜 天	竜 勝
Nāgābhībhū	勇 光	勝 力	勝 天 力	竜 樹	日 天	竜 天	師 子	増 上 力	離 垢 明
Virajaprabha	具 足 交 絡	師 子	師 子	無 垢 光	師 子	天 力	毘 羅 闍 光	無 垢 光	師 子
Simha	雄 慧 王	離 垢 光	離 塵	師 子	無 垢 明	師 子	世 間 最 上	師 子	王 王
Śrīkūṭa	多 力 無 過	德 首 世	天 吉 祥	峯 世 間	天 離 諍	光 山	嶽 世 間 増 上	力 勝	
Narendrarāja	吉 良	妙 德 山	勝 積	仁 王	勝 積	世 天	人 自 在 王	德 山	華鬘(=鬘)
Balābhijña	慧 弁	人 王	人 王	花 幢	人 自 在 恭 敬	勝 積	華 勝	人 王	無 畏 明
Puṣpadhvaja	無 上 華	無 上 華	勝 花	光 明 王	華 勝	人 王	得 四 無 畏	花 勝	香 頂
Jvalanādhipati	衆 大 妙 音	無 畏	発 起 精 進	得 無 畏	発 精 進	華 王	※ 五 十 三 続 仏 勝 勝	徳 無 畏	普 賢
Vaiśāradya-prāpta						華 勝	※ 五 十 三 続 仏 勝 勝	※ 五 十 三 続 仏 勝 勝	普 華 相

※数が少ないので、対照せず、一覧としてあげる。

〈阿弥陀经〉六方諸仏对照表

Sukhāvativyūha	『阿弥陀经』	『称赞净土 仏摄受经』	『仏名经』卷六	『同』卷十一	『阿一切諸 所持之法 經』
Akṣobhya	〈東〉阿閼鞞	不 動	阿 閼		阿 閼
Merudhvaja	須弥相	山 幢	弥留幢	弥留幢	須弥幡
Mahāmeru	大須弥	大 山	大弥留	大 山	大須弥
Meruprabhāsa	須弥光 妙 音	山 光	弥留光 真 声	弥留光明 妙 声	須弥光明 哀 樂
Mañjudhvaja		妙 幢			
Candrasūryapradīpa	〈南〉日月燈	日月光	日月燈	日月住	日月燈明
Yaśaḥprabha	名聞光	名称光	大火聚	称光明	光明名号
Mahārciskandha	大焰肩	大光蘊	称 光		大火炎種
Merupradīpa	須弥燈	迷廬光	弥留燈		須弥鐙
Anantavīrya	無量精進	無辺精進	無辺精進		無量精進
Amitāyus	〈西〉無量寿	無量寿	阿弥陀	無量光	無量寿
Amitaskandha	無量相	無量蘊 無量光 無量幢 大自在	阿弥陀幢	不可量幢	無量幢
Amitadhvaja	無量幢		阿弥陀高		無量幡
Mahāprabha	大 光 大 明	大 光 光 焰	大火光明 大 照	大光明	大 光 大光普遍
Mahāratnaketu	宝 相	大宝幢	宝 幢	宝雜兜	宝 幢
Śuddharaśmiprabha	淨 光	放 光	香 聚	淨 王	淨 光
		〈北〉無量光嚴 通達覺慧 無量天鼓 震大妙音			
Mahārciskandha	〈北〉焰 肩	大 蘊	〈上〉大光明焰聚	大炎聚	大火炎種
Vaiśvānaranirghoṣa	最勝音		火 声	一切王声	喜樂音
Dundubhisvaranirghoṣa					
Duṣpradharṣa	難 沮		難 勝	難 勝	莫能勝
Ādityasambhava	日 生		日成就	日 生	從日興起
Jaleniprabha	網 明	光 網	羅網光	羅網光明	宝網光明
Prabhākara		婆羅帝王		照光明	
Simha	〈下〉师 子	〈下〉示現一切妙法正理 常放火王勝德光明 师 子	师 子	师 子	师 子
Yaśas	名 聞	名 称	称〔王〕	称	名称遠聞
Yaśaḥprabhāsa	名 光	譽 光	威 德	称光明	名声光明

Dharma	達 摩	正 法	法	法	法名号
Dharmadhara	法 幢	妙 法	法 幢	法住持	法 幡
Dharmadhvaṅga	持 法	法 幢	法住持	法 幢	奉 法
		功德友 功德号			
Brahmaghoṣa	〈上〉梵 音	梵 音	〈東〉梵 声	梵 声	梵 音
Nakṣatrarāja	宿 王	宿 王	星宿王	星宿王	最 香
Indraketuḍhvajarāja					星 王
Gandhottama	香 上		香 上	香 勝	
Gandhaprabhāsa	香 光	香 光	香 光	香 光	香光明
Mahārciskandha	大焰肩		大焰聚	大 積	大火炎種
Ratnakusumasampuṣ- pitagātra	雜色宝華嚴身		宝種種華敷身	宝種種華敷身	異宝雜色華身
Sālendrarāja	婆羅樹王		堅 王	莎羅自在王	妙香樹王
Ratnotpalaśrī	宝華德	如紅蓮華勝德	宝蓮華勝	宝蓮華勝	宝蓮華
Sarvārthadarśa	見一切義	示現一切義利	見一切義	見一切義	教授一切諸事
Sumerkalpa	如須弥山		須弥劫	須弥劫	須弥意
		〈東南〉最上広大 雲雷音王			
		〈西南〉最上日光 名称功德			
		〈西北〉無量功德 火王光明			
		〈東北〉無数百千 俱胝広慧			